



普通高等教育“十五”国家级规划教材

宿久高 周异夫 主编

含MP3光盘

日语精读

にほんごせいどく 第四册

外语教学与研究出版社

日语精读

にほんごせいどく 第四册

主编
宿久高 周异夫

编著
宿久高 周异夫 (日)川上京子 于长敏
刘树仁 徐明真 房 颖 胡建军
柳晓东 宋 欣

外语教学与研究出版社
北京

图书在版编目(CIP)数据

日语精读. 第4册/宿久高, 周异夫主编; 宿久高等编著. — 北京: 外语教学与研究出版社, 2011.5

ISBN 978-7-5135-0827-8

I. ①日… II. ①宿… ②周… III. ①日语—高等学校—教材 IV. ①H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2011) 第 075161 号

universal tool · unique value · useful source · unanimous choice



悠游网—外语学习 一网打尽

www.2u4u.com.cn

外研社旗下网站, 打造外语阅读、视听、测试、共享的全方位平台

登录悠游网, 您可以:

- 阅读精品外语读物, 独有资源, 涵盖广泛, 学习必备。
- 观看双语视频、名家课堂、外语系列讲座。
- 多元外语测试, 检测外语水平和专项能力, 获得外语学习方案。
- 外语资源共享, 网友互动, 小组讨论, 专家答疑, 语言学习无疑难。
- 网站推出众多精彩大礼包, 可通过积分换购。

贴心小提示:

悠游网增值服务: 提供海量电子文档、视频、MP3、手机应用下载!

出 版 人: 于春迟

责任编辑: 王晓静

封面设计: 山文丰

版式设计: 蔡 颖

出版发行: 外语教学与研究出版社

社 址: 北京市西三环北路 19 号 (100089)

网 址: <http://www.fltrp.com>

印 刷: 中国农业出版社印刷厂

开 本: 787×1092 1/16

印 张: 19

版 次: 2011 年 5 月第 1 版 2011 年 5 月第 1 次印刷

书 号: ISBN 978-7-5135-0827-8

定 价: 39.90 元 (含 MP3 光盘一张)

* * *

购书咨询: (010)88819929 电子邮箱: club@fltrp.com

如有印刷、装订质量问题, 请与出版社联系

联系电话: (010)61207896 电子邮箱: zhijian@fltrp.com

制售盗版必究 举报查实奖励

版权保护办公室举报电话: (010)88817519

物料号: 208270001

前言

改革开放以来,伴随着我国社会主义现代化建设快速前进的步伐,中日两国间各领域的交流日益频繁,我国的日语教育事业也取得了长足的发展。这不仅体现在设置日语专业的高等院校的增多,招生数量的扩大(据不完全统计,我国目前开设日语专业的大专院校有300余所,日语教师3,300余人,日语专业在校生154,900余人),教学水平的提高,学科建设的加强和学士—硕士—博士人才培养层次的完善等方面,更主要的是教材开发和研究的水平有了质的提高。精读、泛读、听力、会话、语法、概况、国情、文学史、文学选读、文学鉴赏、翻译、文化……,成果累累,出现了百花齐放的可喜局面。这些教材别具特色,各有千秋,分别承担着不同的历史使命和角色,在不同的时期发挥了应有的作用,为日语教育作出了积极的贡献。

语言是物质的存在。任何一种语言形式,或抽象、或具体,表示的都是世间万物的外在概念。而这种外在概念的深层,即支撑语言这一外在形式存在的人类的的生活状态、文化形态等,才是世界的真实存在和人类生活的实态。从这个意义上说,语言是社会文化和文明的传承载体,而教材则是传承和创造文明的文本载体。由此可见,一部好的日语教材,对于学生在学习日语的过程中了解日本文化,并把学习日语和了解日本文化有机地结合在一起会起很大的作用。因此,在教授语言、提高学生的语言运用能力的同时,把日本文化融入教材、融入教学十分重要。

一部好的日语教材,应该具备以下要素:①要有明确的指导思想,即为什么要编写教材,应该编写一部什么样的教材。②要有一个基本的理念,前提就是应该如何理解日语语言文学学科,如何为这个学科定位,这个学科的任务是什么,一部什么样的教材才能完成学科定位所规定的任务。③要有一个核心范畴,解决人与世界的关系问题,从观察和认识的角度,通过教材编写的实践和学生学习的实践,加深对所学语言对象国的认识。④要有完整的逻辑体系,考虑接受主体的实际情况,科学地、循序渐进地阐述教材内容。⑤要有完整的、正确的话语系统和叙述方式。⑥要创新和与时俱进,坚持稳定性和前沿性的统一,权威性和独创性的统一。这部普通高等教育“十五”国家级规划教材,在编写过程中,力求体现上述要素,创造性地完成日

语语言文学的学科定位所规定的阶段性任务,并注重学术含量。此教材在这些方面进行了有意义的尝试。

本教材是在总结了包括吉林大学日语语言文学专业在内的多所院校日语专业近五十年教学经验的基础上,结合国内专业日语教育的实际,参照国内外先进的教学研究成果编写而成的。在编写过程中,首先对国内外类似教材中出现的词汇、语法、句型等必要事项进行了全面的调查、统计、筛选和整理,根据每册教材的任务、目标和要求,确定每册教材的相关事项,因此科学性较强。

第一册为基础日语,课文多由学生提供题材,编者集体讨论、创作而成,涵盖了日语初级阶段应该掌握的绝大部分内容,贴近生活,新颖生动。第二册为中级日语,基本包括了日语能力考试一级和二级要求掌握的全部语法内容,适应面广,实用性强。第三册、第四册为高级日语,选材格调较高,文章表现力强,并具有较强的文化含量,有利于学生掌握更高层次的语言运用技巧,提高日语的综合能力和水平。

本教材选材适当、内容丰富、结构严谨、编写系统、解释精到,尤其重视语言的规范性,并在内容的安排上充分考虑了中国人学习日语的特点。这部教材的另一个特点是,每篇课文的知识量丰富,除了应该掌握的单词之外,还融入了大量句型和语法内容。但解释和说明并非事无巨细、面面俱到,而是更加重视教师的“讲授”作用,为教师根据学生的实际情况,适当调整讲授深度提供了空间。课后练习部分紧紧围绕课文内容和出现的语法事项展开,对课文起到了拓展和补充作用,科学严谨,循序渐进,符合接受主体的认知过程。和既有的同类教材相比,力求不落窠臼,有所创新,形成自己的特色。

本教材是吉林大学日本语言文学系全体教师和日本专家共同劳作的结果,是集体智慧的结晶。在我国日语教育事业繁荣发展的今天,相信这部教材定会发挥应有的作用,在日语界全体同仁的共同关怀下不断改进和完善,为培养高质量、高素质的日语专业人才作出贡献。

中国日语教学研究会会长 宿久高
2006年5月于长春

目 录

第1課 我輩は猫である（抜粋）

1

- 1 本文
- 5 新出語
- 9 文法解説
 - 1. とんと～ない
 - 2. やら
 - 3. ～かのごとく
 - 4. ～癖（に）
 - 5. どうにか、こうにか
 - 6. ～や否や
 - 7. ～に至っては
 - 8. 容易に～ない
- 12 練習

第2課 「ら抜き」と「さ入れ」

13

- 13 本文
- 17 新出語
- 20 文法解説
 - 1. ～た途端（に）
 - 2. どうやら～らしい
- 21 練習

第3課 ロザリオの鎖

23

- 23 本文
- 27 新出語
- 31 文法解説
 - 1. ～やら～やら
 - 2. よくも～／よくぞ～
 - 3. ～なり
 - 4. かねて

33 練習

第4課 理性としての眼

35

35 本文

39 新出語

41 文法解説

1. ともすると
2. 言わずもがな
3. 遂げる
4. ～であろうが、～であろうが／～であろうと、～であろうと
5. ある意味では
6. ～につけ
7. もともと

44 練習

第5課 藤野先生

45

45 本文

51 新出語

55 文法解説

1. いっこうに～
2. ～はしないか
3. それと知らずに
4. 毛頭ない
5. ～ずにしまう
6. あいにく

57 練習

第6課 ときの詩^{うた}

59

59 本文

63 新出語

64 文法解説

1. やむにやまれぬ

65 練習

第7課 ミロのヴィーナス

67

67 本文

- 70 新出語
- 73 文法解説
 - 1. よりよく
 - 2. もはや
- 74 練習

第8課 文学のふるさと

75

- 75 本文
- 80 新出語
- 83 文法解説
 - 1. ～べし
- 84 練習

第9課 バッタと鈴虫

85

- 85 本文
- 89 新出語
- 91 文法解説
 - 1. ～たまえ
- 92 練習

第10課 大河の一滴

93

- 93 本文
- 99 新出語
- 103 文法解説
 - 1. ～に控えて
 - 2. ～と言われれば／と言え、それまで（の話だが）
 - 3. ～（よ）うが～（よ）うが
- 105 練習

第11課 仲間

107

- 107 本文

111 新出語

113 文法解説

1. ～に預かる

2. ～ようと

114 練習

第12課 言葉と身体^{からだ}

115

115 本文

120 新出語

122 文法解説

1. ひいては

123 練習

第13課 とうふ

125

125 本文

128 新出語

130 文法解説

1. さしずめ

2. ～がわりに

3. ～といたらない

131 練習

第14課 技術の正体

133

133 本文

137 新出語

139 文法解説

1. ～たら、きりが（も）ない

2. ひたすら

3. ～たらしめる

4. しかるべき

141 練習

第15課 城の崎にて

143

143 本文

149 新出語

153 文法解説

1. 何かしら

2. ～はしまい

3. ～に相違ない

154 練習

第16課 現代の個人主義

155

155 本文

160 新出語

162 文法解説

1. ～までもなく（までもない）

2. ～に関わる

163 練習

第17課 赤い繭

165

165 本文

169 新出語

172 文法解説

1. ～はずがない

2. ずるずる（と）

3. するする（と）

4. どれ／なに一つとして～ない、（誰一人として～ない）

174 練習

第18課 森と文明の物語

175

175 本文

181 新出語

184 文法解説

1. ～以外のなにものでもない

2. ～しも（だれしも）

185 練習

第19課 任意の一点

187

187 本文

195 新出語

203 文法解説

1. ～挙句（に／の果て）
3. ずしりと
5. そそくさと
7. ぜいぜい

2. ～はずみに
4. ぞろぞろ
6. ついで

206 練習

第20課 同情トイフコト

207

207 本文

214 新出語

218 文法解説

1. もの～
3. そもそも
5. ～にとりつかれる

2. むっとする
4. ～きわまりない
6. ～に値する

220 練習

第21課 山椒魚

221

221 本文

228 新出語

231 文法解説

1. さもなければ
3. 並たいてい～ではない

2. 今は～の場合ではない
4. いたずらに

233 練習

第22課 ピカソへの挑戦——権威破碎の弁証法

235

235 本文

241 新出語

246 文法解説

1. ～を呈する
3. たりうる

2. かくいう

247 練習

第23課 日本文化の雑種性

249

249 本文

257 新出語

260 文法解説

1. いたって

2. おのずから

3. ～どころではない

4. なおさら

5. ～てみる以外には～ない

262 練習

第24課 古典

263

263 本文

266 練習

新出語索引

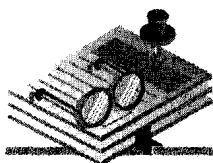
267

文法索引

286

第 1 課

我輩は猫である（抜粋）



本文

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始めであろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶だ。その後猫にもだいぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙を吹く。どうも咽せぼくて実に弱った。これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知った。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐っておったが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思っていると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおった兄弟が一足も見え

ぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまった。その上今までの所とは違って無暗に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐ってどうしたらよかろうと考えて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニャー、ニャーと試みにやって見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡って日が暮れかかる。腹が非常に減って来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這って行くとようやくの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這入ったら、どうにかなると思って竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云ったものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になっている。さて邸へは忍び込んだもののこれから先どうして善いか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降って来るといふ始末でもう一刻の猶予が出来なくなった。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えるとその時はすでに家の内に這入っておったのだ。ここで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢ったのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶって運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのにはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へ這い上った。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上っては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになった。この間おさんの三馬を偷んでこの返報をしてやってから、やっとな胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといひながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出しても御台所へ上って来て困りますという。主人は鼻の下

の黒い毛を撚りながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入ってしまった。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しそうに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に這入ったぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思っている。当人も勉強家であるかのごとく見せている。しかし実際はうちのものがいうような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく昼寝をしている事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらしている。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらわしている。その癖に大飯を食う。大飯を食った後でタカジャスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友達が来る度に何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不人望であつた。どこへ行っても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかった。いかに珍重されなかったかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍にいる事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかったからやむを得るのである。その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気の良い日は橡側へ寝る事とした。しかし一番心持の好いのは夜に入ってここのうちの小供の寝床へもぐり込んでいっしょに寝る事である。この小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入って一間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間に己れを容るべき余地を見出してどうにか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒ますが最後大変な事になる。小供は——ことに小さい方が質がわるい——猫が来た猫が来たといって夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必

ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現にせんだってなどは物指で尻ぺたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど、彼等は我儘なものだと断言せざるを得ないようになった。ことに吾輩が時々同衾する小供のごときに至っては言語同断である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へっついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追い廻して迫害を加える。この間もちっと畳で爪を磨いたら細君が非常に怒ってそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で他が顫えていても一向平気なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君などは逢う度毎に人間ほど不人情なものはないと言っておらる。白君は先日玉のような子猫を四足産まれたのである。ところがその家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持って行って四足ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦ってこれを剿滅せねばならぬといわれた。一々もっともの議論と思う。また隣の三毛君などは人間が所有権という事を解していないといって大に憤慨している。元来我々同族間では目刺の頭でも鰯の臍でも一番先に見付けたものがこれを食う権利があるものとなっている。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて善いくらいのものだ。しかるに彼等人間は毫もこの観念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のために掠奪せらるるのである。彼等はその強力を頼んで正当に吾人が食い得べきものを奪ってすましている。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持っている。吾輩は教師の家に住んでいるだけ、こんな事に関すると両君よりもむしろ楽天である。ただその日その日がどうにかこうにか送られればよい。いくら人間だって、そういつまでも栄える事もあるまい。まあ気を永く猫の時節を待つがよからう。

夏目漱石

注 釈

夏目漱石

1867～1916。明治・大正時代の小説家。主な著書に、『吾輩は猫である』『三四郎』『それから』などがある。

新出語

【本文】

● 吾輩（わがはい）①	〔代〕	吾輩
● とんと ①①	〔副〕	（一般后接否定形式）完全（不）……，一点也（不）……
● じめじめ ①	〔副〕	潮湿
● 書生（しょせい）①	〔名〕	书生
● 狰狞（どうあく）①	〔名・形動〕	狰狞，面目凶恶，性情粗野
● 種族（しゅぞく）①	〔名〕	种，种族
● 別段（べつだん）①	〔名・副〕	格外，特别
● 掌（てのひら）①②	〔名〕	手掌
● フワフワ ①	〔副〕	（心情、态度）浮躁貌
● 見始め（みはじめ）①	〔名〕	初次看到
● 薬缶（やかん / やっかん）①	〔名〕	水壶
● 片輪（かたわ）②	〔名〕	残缺不全
● 出会わす（でくわす）①③	〔自五〕	偶遇，碰见
● 突起（とっき）①	〔名・自サ〕	隆起，突出，突起
● 咽せる（むせる）①②	〔自一〕	噎，呛
● 速力（そくりょく）②	〔名〕	速率，速度
● どさり ②③	〔副〕	重物急速下落或被扔出状
● ～疋（ひき）	〔接尾〕	……匹
● 肝心（かんじん）①	〔名・形動〕	关键，紧要
● はてな ①	〔感〕	咳，哎
● 笹原（ささはら）①	〔名〕	竹子丛生的原野
● さらさら ①	〔副〕	（干、薄物轻触声）沙沙
● そろりそろり ④	〔副〕	慢慢地，悄悄地
● 竹垣（たけがき）①②	〔名〕	竹篱笆
● 邸内（ていない）①	〔名〕	宅邸内，府邸内
● 路傍（ろぼう）①	〔名〕	路旁，路边
● 餓死（がし）①	〔名・自サ〕	饿死
● 一樹の陰（いちじゅのかげ）②〔慣用〕		前世有缘，三生有缘